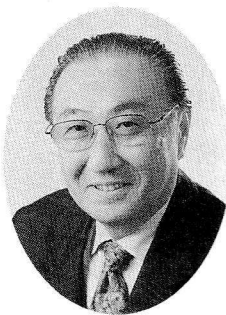


# 幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟  
会報 No.25  
平成15年3月23日

## 五十回横浜能のあとに



会長 新堀豊彦

第五十回横浜能がお蔭様で無事終了いたしました。

大きな節目の大きな舞台、三日間、盛況かつ充実した舞台で、当連盟としては大任を果たした思いで、お世話になりました。會員並びに御来会の市民の皆様方に心から感謝申し上げる次第であります。

三年前から、各流家元並びに出演される先生方の日程調整を行い、番組に關しまして、五十回にふさわしいものにいたすべく、それぞれの流派で御苦心を願ひ、その結果三日間の舞台が、最高の内容をもった堂々たるものになったと自負いたしましたのであります。

さてそこで次はどうするかという問題について、これ又、一二年前から議論を重ねて参りましたが、横浜能楽堂の内容がきわめて充実し、五十年前に中村桃山初代会長が目された横浜における能の普及が進み、現在はすぐれた舞台が常時見られるように発展いたして参りました。「横浜能」のあり方も、この流れにそって改編するべきであるという考え方に立って、新しい形を五十一回からとり入れ能楽堂の事業との関連を重視してやうてゆくことにいたしました。「横浜能」というタイトルはそのまま継続いたしますが、従来、家元級の舞台と位置づけられておりましたものを、若手、地元の能楽師を中心とする企画にかえて、新しく出発いたします。どうぞ御期待下さい。そのため運営の重点が能楽堂

に移りますので、我々素人の立場でこれから何をなすべきかが問題となります。能の公演以外に、横浜における能及び謡曲、仕舞等の普及活動が我々の使命であることは変わりありませんので、今日まで実施いたして参りました諸事業

に「スして新しいきり口、未開拓のテーマについて意欲的に検討、研究し、具体的な展開を是かりたいと存じます。皆さんからのアイデアも募集いたしたいと思っておりますので、遠慮なく御意見を賜りますようお願いいたします。



第50回横浜能記念式典 平成14年9月21日

平成十四年度の総括  
総務担当 鈴木 力雄  
常務理事  
(一)平成十四年度の特筆すべき事業は、「第五十回記念横浜能」の平成十四年九月二十一日から二十三日の三日興行を実施したことでした。

各流家元の日程調整を行い演目等は、一年程前に固まっておりましたが五十回記念にふさわしい番組や宣伝ポスター等を検討するための「番組等編成会議」(委員長 原常務理事)を設置し、遺漏なきよう対処して参りました。  
記念番組には、第一回から第四十九回までの過去の番組記録を収載し、ポスターを市営地下鉄車内に掲示しました。  
横浜能初日の九月二十一日には、横浜市長、神奈川県知事に御出席いただき記念式典を挙行し、あわせて横浜能楽連盟永年勤続者(原博之、渡井蘭子、井実昭子、高橋利雄、廣井徳平の五氏)の表彰を行いました。  
又、「第五十回記念式典横浜能」が無事終わりましたので、平成十四年十一月二十八日に「第五十回横浜能記念の集い」を九十人余のご参加いただき催しました。  
横浜能楽堂の完成、その後の運営など横浜能の当初の目的が

達成された現在、これを節目として、新しい横浜能の創造を目指してそのあり方を検討して参りました。

第五十一回横浜能からは、横浜能楽連盟と横浜能楽堂との共催として「横浜能」の名称を生かしつつ地元ゆかりの能楽師による演能とするなど、五十年の歴史を生かした運営とすることが決まりました。

(二)第十八回五流能楽大会は平成十四年六月八日、第六回五流交流のつどいを平成十五年二月八日に、それぞれ実施いたしました。

なお、例年六月に開催していた五流能楽大会は、十九回以降九月に開催いたします。

『第六回五流交流のつどい』の報告

常務理事 土屋 政雄  
金春流

今年の交流のつどいは平成十五年二月八日、横浜能楽堂本舞台で開催されました。

今回は私も金春流が当番を担当し番組の編成から当日の運営までお手伝い致しました。何かと行き届かぬ点が多かったと思いますが、各流派の責任者やご出演の方々のご協力に厚くお礼申し上げます。

幸い当日は天候に恵まれ、一日中暖かい日和で見所には女性の和服姿が目立ち華やかな雰囲気

気に包まれていました。受付では番組が二〇〇枚程捌け、電話での問い合わせが十件程あり、関心の深さが感じられました。

各流派出演実績

	演目(番)			
	観	世	流	計
(観)梅若会	2			2
宝生流	4	2		6
喜多流	3	2		5
金剛流	2	3		5
金春流	3		1	4
合計	24	15	3	42
始曲	9時30分		終曲 5時50分	

進行に当っては、事情により午後の演目順序を前倒しするなどで出演者にはいろいろご迷惑をおかけいたしました。

これについては「めぐり」との連絡を密にする必要があると感じました。

いずれにしましても無事に「つどいの会」を終えることができ関係の皆様にお礼を申し上げます。

「守り」の美学

喜多流 大館 惺雄

昨年秋の能楽堂での講演会で、

山崎館長が、「謡いを習う人は「能」を観なさい。そして評論家になりなさい」と言われたことが印象に残っている。それは「能」を繰り返し観れば、稽古

している「謡い」にも自ずと深みも出る筈だ、ということなのだ。だが私にとっては「謡い」を続けている功徳は、それを入口として「能」の美しさを

知るようになったことと、能楽とは言わないまでも、何かとその周辺に興味を持つようになったことである。始めはよくわからなかった「謡い本」が能の舞台を作り上げる台本であることが実感できるようになったこと

も、その一つである。「謡い」の稽古を続けることは、私にとって能の世界への関心を持続させる水源地のようなものである。ところで、今、これを書いて

いる脇ではTVがモーツァルトのオペラ「コシ・ファン・トツテ」を放映している。バレンボイム指揮のドイツ国立歌劇場の公演である。画面で見る舞台にはびっくりした。十八世紀のモーツァルトの世界が現在の姿にアレンジされているのである。

主役の姉妹は原色のサロンをまとい、舞台上の家の中には、電話・キッチン・モダンな家具が並べられている。実に奇抜な舞台作りである。思えば、ヨー

ロッパのオペラは常に目新しい演出を競い、演出そのものを話題作りしてきた。夏のバイロイト音楽祭が良い例だろう。

「能」の世界はどうだろうか。何しろ、今の能舞台の在り様は信長の時代に整ったものが、そのまま傳承されているという。何百年の間、政治の変動、

社会システム、人の考え方の移り変わりがあつながら、あの三間四方の空間と、橋掛りだけで構成される簡素な舞台の様式が、何の手も加えられず、そのまま守られて今に至っていることは、驚くべきことと言わねばなるまい。

舞台上の所作なども、世阿弥を始めとする中世の伝書なしには、今の姿はないのだから、能に接するということは、数百年にわたり守られ伝えられた文化に、そのまま触れることにはかならない。それでいて、全体が古色蒼然としていないのは、限られた空間で発揮される創造性と、一期一会の緊張した演技があるからだろう。「能」の魅力の源宗は、まさにそこにあるものと思う。

翁、芭蕉、江口、定家、田村、松風……これは横浜能の公演記録ではない。何と一五九三年、秀吉が時の後陽成天皇の前で舞ったと言われている演目である。能は何百

年にもわたって守られてきた文化であることが実感できるではないか。

「世界無形文化遺産」に登録されたのも、むべなるかなである。「神奈川宝生流の歩み」の発行

宝生流 秋山 尚

当流には長く稽古を積み芸道熟達の者に、家元より教授嘱託の免状が授与される。これは初心者も教えて流友を増やし、職分に送りこむ、所謂礎石的な役割で流儀の発展に貢献することにあります。この制度は戦前よりありましたが、昭和三十年に全国的な横断組織として教授嘱託会が誕生した。当神奈川支部も当初は東京支部に属していたが会員も増え、昭和三十八年、正式に神奈川支部として発足した。今年には丁度創立四十周年に当たり、この機会に何か足跡を残そうと、掲題の記念誌を発刊する運びとなった。

横浜の宝生流は名人、松本長師をはじめ近藤乾三、高橋進師(いづれも人間国宝)が大正、昭和にかけて稽古や舞台を勤めた歴史もあり、かなりの謡い人口を擁していた。戦後横浜謡曲連盟の発足時より五流の一角として、横浜能や横浜能楽堂の建設に協力し、更に五流大会等に

も積極的に参加して来た。一方、囃託会とは別にあった歴史の古い横浜宝生会を一度解散して、現在の横浜宝生流連合会が昭和六十一年に再発足した。連合会の役割は当時具体化されつつあった能楽堂建設の受け皿組織を担い、謡曲同好会としては初心者も含め幅広く参加できるように門戸を開放している。

囃託会、連合会の二大組織が現在神奈川県内の宝生流を牽引している。偶々、囃託会の記念事業に連合会も参画し、協同で記念誌を発刊することになった。既に編集委員会も発足し、鋭意編集作業に取り組んでいる。記念誌の内容は概略次の通りに纏める予定となっております。

- 一 序文(推薦文も含む)
- 二 横浜能楽堂 山崎館長のことば
- 三 神奈川宝生流の歴史(戦前から)
- 四 教授囃託会の成り立ちと発展
- 五 横浜連合会の発足(横浜能楽連盟、能楽堂建設のかかわり)
- 六 神奈川宝生流四方山話(座談会)
- 七 囃託会、連合会、横浜能等の記録(各種資料網羅)
- 八 同好社中の紹介
- 九 これからの宝生流の発展

と愛好者の勧誘  
十 流友からのひとこと(會員のエッセイ)

十一 あとがき  
初めての能舞で

観世流 近藤恵美子  
梅若会

謡、仕舞の稽古を始めて数年が過ぎたころ、先生から「能」を舞ってみませんかと言うお話があり一瞬、私に「能」を舞うことができるのだろうか、一抹の不安がよぎりまして発表会で「清経」を舞うこととなりました。

この頃は謡の稽古を始めて数年すぎているとはいえ「能」そのものは、まだよく分からないまま「清経」の稽古に入り、ただただ先生の言われるままに謡を覚え、型、所作をおぼえるのに精一杯でなにも考える余裕もなく、申し合わせとして発表会当日を迎えたように思います。



当日は緊張のうちに時は過ぎ、装束を付けて、面をかけた顔もこわばり、自分がまるで他人のこのような気持ちのまま、揚幕が上がり橋掛りから無我夢中で舞台へと進み、面の視界の中で舞台から落ちないように、謡は絶句しないようにと

の思いだけで、まるで雲の上を歩いているような気持ちのうちに、なんとか留拍子を踏み舞い終りましたが、ほんとうに長く感じられたように思います。

舞のすべてが終わり緊張感もどけ冷静になってみると自分なりの達成感が湧き上がって来るような思いに駆けられるなげか不思議な魅力が能舞にはあるように思います。

昔、またその昔のお話  
観世流 江波戸菊代  
海謡会

その一  
初舞台の頃

私が小学三年生になった時、毎月五日、十日に我が家へ先生をお迎えして、親戚や知人も集まり賑やかに楽しくお稽古をするようになりました。それから一年経った時の事です。

多分、今の一樹会の様なものだったのでしょうか。東京の或舞台、既橋(?)で大会があった

て我が家でお稽古している方々も何人か御出演になり、私と二人の妹も仕舞をする事になりました。新調の袴をつけて初舞台と言うわけでした。お番組の都合で何か静かな長い曲の後直ぐ私達の仕舞でしたので、その曲の前に私共の袴をつけてくれて大人達は舞台へ行ってしまうました。始まりの頃は神妙に座っていたのですが、次第に待ち疲れてきてごそごそと動きだし、とうとうそーっとお幕の蔭からのぞき見をしたり、楽屋へ戻ったりという状態になってしまいました。その時楽屋の向こうから万三郎先生が此方へ歩いていらつしやると、下の妹に向かつて、「お嬢ちゃん、ちよつといらつしやい。お袴のひもがゆるいからなおしてあげましょう。」とおつしやってお直し下さったのです。折しもその少し以前にお能で「安宅」の辨慶を拝見した時の印象が強かった私は「なんてお優しいおぢいさま」と驚きました。それは辨慶が子方の義経を金剛杖で情容赦ない程に打擲なさった場面を拝見した時に、まさか本当にはなさらない筈と思いつつもやはり大変怖い様な感じがしていたからでした。

た。年輪をたつぷり重ねた今、ふとその事について思いついたのは、本当に妹の袴の紐がゆるんでいたのか、私は一緒にいたのに気がつきませんでした。拝見していた所、先生はくるくると前の紐を何回かほどかれ、手でもう一度それを締め直され軽くたたたく様にされ、「ハイ、これで大丈夫。もう直ぐですからね。」とおつしやると、私達も元の所へ坐り直し静かになりました。気が付くともう其所に先生のお姿はありませんでした。少々理屈っぽくなって居た私は、あんな離れた所から袴の紐のゆるみが、よくまあお見えになったものと感心したり、不思議にお見えになったりしたのですが、多分お幕の蔭から覗いたり「そうつと」とか「だめ」とか小さな声で「ごそごそしていた事にお気付きなられたからだったのでしょう」と今思い出すのです。そしてその様な時、子供というものは「静かにしなさい」と言われて「はい」と答えて静かになるのは一瞬で、ごそごそと遠慮がちに少しずつ動き始め、話声が次に少しずつ大きくなっていくもの様です。その点への御配慮によつて少しでも長く大人しくさせる為の御思慮の深い事だったと、今静かに思い出すのです。



その二

天佑神助の獅子頭

昭和三十一年私も多少余裕が出来たので、只一先生にお稽古をして頂く様になりました。先生は既に御隠居様の御身分で、お稽古もたつぷりして頂き、お稽古の後でお若い頃の横浜でのお話をいろいろお伺いしました。

ある時、伊勢山皇大神宮の御舞台で藤野のおぢいさんが「望月」のお能を舞われる事になりました。所がその当日、何と獅子頭がお荷物の中に入っていたかたそうです。今なら直ぐ電話して、高速道路を車でという事も出来たでしょうが、厩橋のお住居から御徒町まで出て、そこから現在のJ.Rの電車で各駅を止り止り来るしかない時代の事、六郎先生も只一先生も真つ青になられた様でした。兎に角何とかしなくては、と言う事になり、ふと思いつかれたのが大神宮様のお神楽用の赤い頭だったそうです。そしてお貸し下さったのは新品でしたとの事、「望月」も御首尾よく終了する事が出来て、一先ずほっとなされた様でした。

所が後で万三郎先生が「今日の頭は少しおかしかった。」とおっしゃったので、只一先生は又もドキッとされましたが、

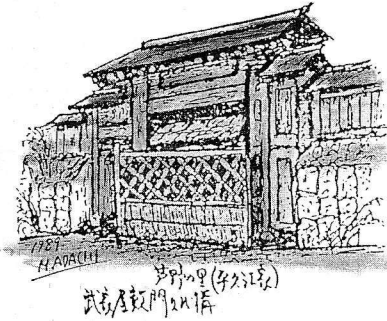
「あれは藤野さんのお知り合いやお弟子さんから贈られたものようです。」と申し上げてやっと危機を脱したそうでした。「後で六郎先生が、『今後共兄さんには言うなよ』と、当時のお金で○円貰いましたよ。」と、ちよつと首をすくめる様に笑いながらお話になりました。金額の程は忘れてしまいましたが、その頃はまだ銭の下の位の厘という単位の小銭が使われていた時代の事でした。

遊行柳

観世流 野渡 圭一  
梅若会

田園の中に凜としてたたずむ「柳の精」これが遊行柳なのです。西行上人の歌に「道のべに清水流るる柳かげ しぼしとこそ立ち止まりつれ」その他に古今の歌人の歌から此の柳の事を我々は知り得るものです。「今も又流れは同じ柳かげ 行きまどひならば道しるべせよ（蒲生氏郷）「今もなお吹きつたへたる法の風 柳が枝に見せてかしくけ」「朽ち残るあしのの柳末の世に、訪ふのりの道はありけり」（遊行上人）とてもものびのびとした感。又柳に風おれないこともよくわかる。

石の城下町です。現在那須は首都機能移転の候補。又、芦野は新幹線が東京より「那須塩原駅」迄約一時間、駅より車で約半時間の距離。此の芦野氏家老として永年勤めてきた「平久江家」は母の実家です。私は仕きたりに依り誕生から五十日間住み、再度前大戦末期二年間疎開し、



能楽堂だより

四月〜七月の公演

横浜能楽堂では次の通り公演を開催致します。

【第十五回特別公演】

四月十三日（日）午後二時。

能「初雪」（金春流）金春安明、狂言「月見座頭」（大蔵流）茂山千作。正面五千二百円、脇正面四千元、中正面・二階三千三百円。三月十六日よりチケット発売中。

【第三十九回普及公演】

五月三十一日（土）午後二時。能「半部」（観世流）武田尚浩、狂言「井杭」（和泉流）野村万之丞。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。チケット発売は四月十九日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

【第四十回普及公演】

「イブニング能」六月六日（金）午後七時。能

「田村」（観世流）関根祥人、狂言「盆山」（和泉流）野村与十郎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。チケット発売は五月三日（土）午後二時三十分から。お問い合わせ・お申し込みは、〇四五（二六三）三〇五五まで。

《編集後記》

▽横浜能は、昭和二十八年十一月の第一回から昨年九月の第五十回までの半世紀を一年も休まず、多くの皆様に支えられ継続されて来た。今年から次の半世紀に向けて新しい「横浜能」として出発します。▽昨年十一月二十八日に行われた「第五十回横浜能記念のご苦労さん会」のなかで横浜能楽堂 山崎館長に「謡曲愛好者の皆様に望む」という演題でお話いただきましたので幽玄特集としてまとめました。M・S記

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合 〒233-0013 横浜市港南区丸山台二丁目 二九一七 新堀方 FAX 〇四五-八四四-二九〇三 ◎電話の場合 横浜能楽堂 末広思帆 TEL 〇四五-二六三-三〇五〇